

Rana P. B. Singh,
Geographical Thoughts in India :
Snapshots and Visions for the 21st Century
Cambridge Scholars Publishing, 15 August 2009, xvi + 429 pp, \$66.99

虫賀 幹華

著者 Rana P. B. Singh は、インドのバナーラス・ヒンドゥー大学 (BHU) の文化地理学者である。地理学者の著作を「宗教学」年報で取り上げることになるが、本書は、宗教学的な要素を多分に含んでおり、また「聖地、聖空間」の扱い方に関しても非常に有益な示唆を与えてくれる著作であると考えられる。

さて、彼の過去の活動や現在の研究テーマは、本書の意図を知る上で重要であると思われるため、簡単に触れておきたい。彼は、遺産計画と環境協会 (SHPEH) (1989)、北インド文化協会 (INCA) (1992) などの創設者である。海外でも広く講義を行い、現在はユネスコの「生きた遺産としてのインド都市のネットワーク」のバナーラス支部の代表者を務め、また国際地理学連合 (IGU) が主宰する「人間の発展への文化と文明 (CCHD)」(2005 年開設) の南アジア代表でもある。彼は文化遺産計画、環境保護志向の観光を研究・促進し、ここ 30 年間は特にバナーラス地域の研究、そこから発展させた社会活動を進め、現在は、バナーラスの世界遺産指定を目指し活動している。また一方で、著作の数も非常に多い。インドの聖地、特にバナーラス研究の第一人者であると同時に、様々な国際活動に参加する著者の態度には、インド国内外に対する「発信力」の高さが見られ、これは彼の特徴の一つであるといえるかもしれない。

本書は「地球という惑星と文化的な理解 (Planet Earth & Cultural Understanding)」シリーズの 2 巻目である。このシリーズの目的は、国連の「持続可能な開発のための教育の 10 年間 (UNDESD)」の後援のもと、「持続可能な共生のための学び」を奨励し、地球上の生命維持システムの相互依存性を理解し、人道に適い平和な生活を促進し国際的な友愛 (人類同胞主義) を発展させるよりよい世界市民性を形成すること、そのために過去の遺産の価値を理解、尊重、保存できるような革新的で学際的な示唆を与えることであるという。また、本書、本シリーズは、文化地理学者として活動してきた著者が、様々な問題を孕む現在の世界、地球のためにできることを模索した結果、「持続可能な共生のための学び」というキーワードの下にこれまでの研究をまとめたものであり、著者にとっては集大成とも言えるものだろう。以下はシリーズの詳細である。

1. *Uprooting Geographic Thoughts in India: Toward Ecology and Culture in 21st century.* 9 May 2009
3. *Banaras: Making of India's Heritage City.* 30 October 2009

4. *Cosmic Order and Cultural astronomy: Sacred Cities of India*. 15 December 2009

5. *Sacred Geography of Goddesses in South Asia*. 15 April 2010

以上が、本書の背景にある、著者の大きな目標であるといえよう。

さて、本書の目次は以下の通りである。

Preface : Walking on the Path of Indian Geography

1. Metaphysics and Sacred Ecology: Cosmos, Theos, Anthropos
2. Lifeworld, Lifecycle and Home
3. Landscape as Text: Literary Geography and Indian Context
4. Historical Geography of India: Trends in 21st Century
5. Cultural Geography of India: Trends in 21st Century
6. Geographic Milieu and Belief Systems: An Appraisal
7. Sacred Space and Faithscape
8. The Gangā (Ganges) River: Image and Symbol of India
9. Indian Village: A Phenomenological dialogue within Habitat System
10. Heritagescapes of India: Appraising Heritage ecology
11. Development in India: Appraising Self Retrospection

1, 2章はインド思想に関する記述であるが、思想一般の概観というよりも、空間・時間観に関わるものを中心に述べている。3, 4, 5章では、それぞれ文学地理学、歴史地理学、文化地理学について、過去から現在までの動向を述べた上で、現在地理学者がすべきことに言及する。6, 7, 8章は聖地、聖空間に関する記述であるが、3-5章から続く流れに従えば、宗教地理学の説明ともいえるだろう。6, 7章が主に理論、8章は具体例を示している。インドの村落を扱った第9章は、集落地理学の方法を示したものともいえる。文化遺産について述べた第10章は、遺産生態学という新しい学問を展望している。よって3-10章は、書名通り、「インドにおける地理学的思考」の説明ともいえるだろう。まとめの11章では、近年発展著しいインドの今後についての提言をしている。

ここからは、各章を順に概観していく。序文では、インド地理学の歩みを概観している。その際、インドの歴史—インダス文明以来の非常に古く膨大な蓄積をもつ一方で11世紀以来のイスラームの侵攻、ムガル帝国による統一、続く欧州諸国の進出、イギリスによる支配—を踏まえ、「インド」を扱う学問の姿勢を描いている。20世紀初期、イギリスで教育を受けた学者により始められたインドの地理学は、帝国主義的な概念の継承を任務としていた。しかし多くの学者たちは、インド的特質 (Indianness) とは何かを考え続けてきたという。この序文からは、このような中で発展してきた学問への対抗、見直しをし、インド人によるインド地理学が推進されるべきである、という著者の使命感が感じ取れる。

第1章では、ヒンドゥー教の根本的思考のうち、人と環境の調和した関係、究極的実在の想定が見られるものとして、創造神話、宇宙的時間のサイクル (4ユガと時間の循環)、A, U, M—聖音「オーム」で表される3つ組、身体の7つのチャクラ、生命の原始としての大地/母の女神、ヤントラと方向概念、5つの形態で表される、(つまりすべてを表す究極的実在としての)

シヴァなどを挙げている。章末では、21世紀におけるインドの役割は、インド古来の「自然、人間、神の調和・一体性」の考え方、さらには「世界村」の考え方を広めることであると、本書の目的とこの章を繋げている。また本章で注目すべきことは、ヒンドゥー思想と生態学との関連が重視されている点であろう。

第2章も、ヒンドゥー思想の「宇宙と人間の一致」が述べられているが、マンダラとフッサール派現象学で用いられる「生活世界 *Lebenswelt*」に注目する。まず宇宙のイメージを反映したマンダラ概念が、寺院や家の構造に拡張されていることを具体的に示す。次に、寺院を建設する際に敷地に描かれるという「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」——一体のプルシャ（原人）の上に描かれたヤントラーを取り上げ、宇宙と身体の同一性の想定を示している。また、『マヌ法典』の原人プラジャーパティの解体による世界創造（頭、心、腿、足がそれぞれブラーフマン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラになる）も、身体と社会構造の同一性の想定例としている。後半では、「ヒンドゥー教とはドグマやルールではなく、生き方や日々の経験の中の道徳的義務（*dharma*）を扱うものである。」(p.76) という考えから、ヒンドゥー教徒の「生活世界」とライフサイクルについて述べている。四住期（学生期、家住期、林住期、遊行期）と人生における四大目的（ダルマ、カーマ、アルタ、モークシャ）に言及し、ヒンドゥー教徒の一生は宗教儀礼的实践と義務に関連付けられた行為の統合体であるとする。ここで特に重視されているのは、日常的に行うべきとされている五大供養と、それに関連する、すべての生命の源としての5つの要素（大地、水、火、空、大気）であり、これらは人間と宇宙の繋がりを示すとしている。

第3章は、文学を、文化、人々、信仰体系の理解のための情報源として研究する文学地理学についてである。まず文学地理学の先行研究を概観した後、特にインドでの研究について述べる。ここでは多くの研究者（20世紀末から最近まで）の成果を具体的に挙げるが、彼らに影響を与えたのは、実は一世紀も前の、ラーマヤナを情報源にラーマが訪れた場所を詳細にたどった *Pargiter* の研究¹⁾ であるという。そして著者自身の文学地理学的研究²⁾（バナーラスについて書かれた文学を、古代から現代まで年代順にまとめたもの）を紹介する。様々なバックグラウンドを持った作者たちがその当時の経験的な視点から描いた作品を並べることで、バナーラスの「万華鏡的な」像が出来たと自身の研究を評価する。

第4章は、インドにおける歴史地理学についてである。著者のいう「現代」とは、「ポスト帝国主義、ポストモダン」の時代であり、特に「ポスト帝国主義」は本章の重要なキーワードであろう。本章の先行研究のまとめから、現代歴史地理学の動向として、古典文献を現在と関連させながら再解釈すること、国家的な動きやリーダーたちだけでなく、地域や一般大衆の歴史にも目が向けられるようになってきたこと、ある地域（特に聖地）にフォーカスしてその歴史的発展を分析する研究が出てきたことなどが挙げられるだろう。

第5章は、「文化的景観」を主たる研究対象として発展してきたという文化地理学についてである。「文化」とは環境に対する人間の反応であると定義をした後、インドの文化地理学の先行研究を列挙する。*Gardner* の「環境への適応のプロセスの中で、社会は自然から資源を得ると同時に災害などに対処してきた。³⁾」を引き、この過程における宗教の役割—巡礼を通しての自然の深い体験—に着目したものとして、自身の研究も紹介している。そして、環境と人間の相互作用により生み出された聖地は文化的景観の典型であるとして、特定の地方の宗教的アイデンティ

ティ形成に果たす聖地の役割を考察した研究⁽⁴⁾ (Granoff & Shinohara) やグジャラート地方の聖地の形成過程を述べた研究⁽⁵⁾ (Sinha) などを挙げる。

第6章は、導入部で「人々の、景観への順応や創造において発揮する力としての宗教の研究」と定義された (Levine⁽⁶⁾を採用) 宗教地理学についてである。著者は、多様な民族、言語が入り乱れている場所に適しているとして、宗教地理学のインドにおける有用性を指摘する。また、環境的危機に直面している現代は、空間の神秘性、水の聖性、宗教的实践、象徴、秩序に含まれる意味の再考が必要であると、現代における宗教地理学の有用性も主張している。まず、宗教地理学が扱える事項として、現代インドの各宗教の信者人口に基づく分析や、ヒンドゥー・ディアスポラ (様々な国と地域へのヒンドゥー教徒の離散) などにも言及した後、聖なる空間について述べる。ここではエリアードの記述を多く引用し、聖/俗の空間理解、ヒエロファニー、祖型としての神話といった考え方を採用している。「エリアードは地理学者ではないが、宗教地理学の発展に、特に聖と俗の区別の考え方で多大なる影響を与えてきた⁽⁷⁾。」という Park の評価を引いて、エリアード的な空間理解と地理学の関係を明らかにしている。本章では儀礼と空間・時間の関係も扱っているが、次章と重複する部分もあるため後に併せて述べる。結論部では、Geopietry (土地への崇敬、愛着) と Geosophy (地に関する知識体系) は、地球と生物の相互関係、統一体といった考え方もつ Ecopietry, Ecosophy のようなインドの文脈で改変されるべきであると主張する。また、宗教がもつ「理論、倫理、実践」の相互関係は、地理学の文脈では「信仰 (が現れる) 景観 faithscape」として表現でき、景観の中に顕現している聖と人間の相互関係を分析する方法論としての地理学の可能性を述べている。

第7章は、聖空間 (「聖地 sacred place」ではなく、より抽象的なものを指示できるとして「聖空間 sacred space」を意図的に用いている。) と信仰景観についてさらに詳しい考察をしている。導入部で、エリアードなど聖空間の説明に関する先行研究に言及したあと、人間の経験と場・景観の関係、特に聖地のでき方について述べている。例えば Swan の「ある場所の聖性は、霊的世界と自然、そしてその地域の人々の作用の集積的な産物である⁽⁸⁾。」に見られるような、聖地は始めから聖地なのではなく、環境と人間との相互関係により生まれてきた、といった考え方がある。続いて著者は、P. Lewis が確立した文化的景観を読み解く原則⁽⁹⁾は聖空間にも応用できるとし、ここでは6つの原則を挙げている。次に機能としての聖景観を述べるために、Meinig が提唱した「1つの風景に対する 10 の見解⁽¹⁰⁾」を聖景観に応用している。続けて空間の聖性の所以 (人工的な建物や寺院、原型的-象徴的な空間 (バナーラスや京都など)、自然) に基づく分類⁽¹¹⁾を紹介している。

本章の後半では、信仰景観の一つである儀礼景観 rituelscape について、幾何学的な分析を行っている。6章では、空間は儀礼の構成に重要な役割を果たすこと、時間の宗教的観念は、浄と不浄、吉と凶に関係があることに言及しているが、7章ではこの考え方に則り、ヒンドゥー教の儀礼は、適した時、場所が定められていると説明し、ここで著者は自身の、時間と空間による聖性の強さの観点から描いた、儀礼の5つの幾何学的パターン⁽¹²⁾を紹介する。ここから、時間や空間は均質ではなく、その変化によって、個人や儀礼の聖性に変化が見られることが分かる。そして、空間 - 時間の連続体の中での継続的な儀礼実践は、信者の聖性の高低を表現する「儀礼的マンダラ」(先程の5つのパターンを併せたもの) で表現されるという。最後に具体例として、カー

シー・ダース・バーバーのプージャー（1982年8月3日にシヴラームプル村で開催されたもの。時、場所は天文学的見地と土着信仰により選ばれたという。）の分析を載せている。特に儀礼斎場が、9×9の81の四角形で区切られ、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを表している、つまり人体、空間、宇宙の象徴的合併を表しているものであることに注目している。

第8章は、7章で述べた聖景観の一例として、ガンジス川（ガンガー）を取り上げる。また『ギター』や『パドマ・プラーナ』などの記述を根拠に、「生命の救済者としての原始の流れとして、三界を流れる神の力として、ガンガーは「持続可能性」の精神を明示している。(p.274)」と述べていることから、ガンガーは本書の目標に直結する例の提示でもあるのだろう。著者は本書を通して、人と自然との繋がりに再三言及しているが、ここでは重要な通過儀礼をガンガーの岸辺で行うことや、クンプ・メラーの紹介をすることで、川と人間の相互関係は様々な行為・儀礼により維持されていることを示している。また、ガンガーの力は特定の聖地でより強くなるとの考え方もあり、ガンガー沿岸の聖地を、源流のゴームクから河口のガンガースーガルまで説明している。最後に、ガンガーの深刻な汚染問題とそれに対する施策について述べている。インド人にとってのガンガーの「価値」を今一度再確認すること、そしてガンガーの精神の見直しの必要性を主張している。

第9章の詳しい内容は割愛するが、ここで著者が村落を分析したのは、インドを考える上での村落の重要性（全人口の四分の三が住んでいる）を考慮したのと、著者は村そのものが「場所としての民間伝承（place ballet）」である、つまり村には今なお古代からの文化が残っていると考えているからであろう。

第10章で取り上げた文化遺産もまた、「歴史的文化的過程の中で発展した、人々の感情が体現されたもの」であると著者は捉えている。導入部で、「遺産」にあたる「dharohara」の語源から、遺産は、それと相互関連した社会の枠組みと文化の特質もふまえて論じられるべきであり、非実体も含むことから、「dharohara」は「遺産的景観 heritagescape」と訳されるのがよく、「遺産生態学」の視野で説明されるべきだとする。本論では、ユネスコの提示する世界遺産の条件、指定済みの世界遺産に触れた後、遺産は文化的資源であり保護されるべきだと述べる。また、著者が遺産に注目するのは、その保護が持続可能な開発に繋がるとも考えているからであり、著者自身の現在の活動なども考慮すると、10章は本書において重要な位置を占めているだろう。

第11章ではまず、「発展 development」の再考が必要になっている現代における、自然に対する倫理的かつ宗教的なアプローチの重要性を主張する。その際、自己は宇宙と一体である「アートマン」であるという感覚を持つことが必要になるという。そして、インドが抱える多くの問題に言及した後、インドの精神や社会に多大なる影響を与えたガンディーとネルーの考え方を比較・紹介する。最後に、既存のものに代わる発展の方法として、道徳的規範、民主主義的な資本主義、社会主義の統合を挙げる。

以上が、本書の概要である。さて、本書は全体を通して、古典文献等に見られる哲学的な考え方と、現在を繋げて論じようとする努力が見られた。そもそも著者は、現代の地理学において、古典文献を現代の文脈で再解釈することの重要性を主張している。思うにこの主張は、著者のインドの捉え方に由来するものであろう。それは、地域ごとで異なる地形的特徴、歴史を持ち、文化的にも多様であるが、「インド」という統合的な本性が存在すること、インド人の基層にはヴ

ューダ的思想が未だにあること、である。中でも本書で繰り返し言及していたのは、「人—宇宙（世界）の相関関係」である。

「人—宇宙（世界）の相関関係」の枠組みを、現代でも見られるヒンドゥー教の根本的思想として用いたことの利点の一つは、これをもとに空間を捉えられたことである。2章の寺院や家の構造とマンダラ（宇宙イメージ）の対応、6、7章の後半の儀礼空間とマンダラの対応がこの例である。またこの枠組みをもとに「宇宙（マクロコスモス）—聖空間（メソコスモス）—人間（ミクロコスモス）」という関係で聖地を説明したことも挙げられる（7章前半）。「世界は一つである」のような考え方とは一見矛盾する「聖／俗」の区別や「浄／不浄」観は、このように聖空間を宇宙に対応するものとして見ることで説明できるのではないだろうか。また、時間の変化に伴う聖性の変化（7章後半など）も、宇宙のリズムの空間の聖性への反映を示しているといえるだろう。

また著者は、「人—宇宙（世界）の相関関係」の枠組みを、前述のような、人や寺院、家などと宇宙（世界）の一致ではなく、「人と宇宙（世界）の相互関係」特に「人と環境の相互関係」としても用いている。そして、「文化は環境に対する人間の反応である」という考え方に則り、文化的景観、特に宗教的な景観（聖景観 *sacredscape*、信仰景観 *faithscape*、儀礼景観 *ritualscape*）の分析を行っている。第6、7章の前半部分における、エリアーデの引用、聖空間の解釈に関する先行研究の提示と考察は、ヒエロファニーや、それにより「聖」となった空間を「聖景観」として、また同じように、宗教、信仰の現れを、「信仰景観」として捉え、地理学が扱える領域に落とし込もうとした過程、とまとめることができるだろう。本書で随所に見られた「一景観（一scape）」という語は著者独自の、宗教に対する地理学的アプローチと捉えられよう。著者の聖空間の捉え方を端的に言えば、聖空間はヒエロファニーであり、ヒエロファニーは環境と人との相互関係によるものである、であろう。この考え方に従えば、環境と人との相互関係を分析してきた文化地理学は、聖空間の分析に関して非常に可能性があるといえるだろう。

さて、宗教に対する地理学的アプローチを行った例として、鈴木秀夫の『超越者と風土』⁽¹³⁾—砂漠的な思考と森林的な思考を対置し、風土によって体が形づくられたように、風土が超越者（神）に対する認識の仕方を作ってきたことを論じた一などがある。これと比較すると、鈴木がどちらかといえば「風土→人間」の方向を考慮しているのに対し、著者は環境⇄人間の相互作用を前提にして、そこから文化（宗教も含む）が生み出されてきたという感覚を持っている印象を受けた。その利点としては、生態学の視点を取り込めていることが一つ挙げられるだろう。

しかし、「人—宇宙（世界）の相関関係」の枠組みの重視に由来する問題点も指摘できる。人間と宇宙の一体性という思想をもとに、古代からの思想が現代にも生きていることを示そうとするあまり、逆に、現代への視点が疎かになっている印象を受けた。著者はヒンドゥー教を、生き方や日々の道徳的義務を扱うものとしているにも関わらず、本書で著者が扱っているのは哲学的思想がほとんどである。2章で「生活世界」に触れてはいるが、日常生活の中のヒンドゥー教としては五大供犠にしか言及がなく、これも「人間と宇宙の繋がり」を表すものとして要素に還元されており、日常生活における五大供犠の位置づけなど包括的な視点はない。また、四住期や四大目的への言及はあるが、これも人の人生が一つの宇宙として捉えられるとの解釈があるだけで、現代の生活世界を論じているとは言えない。その証拠に、現代では多くの人が家住期で人生を終

えているといった事実に対する配慮は見られない。現代のヒンドゥー教への言及が少ないことは、ヒンドゥー教の内部から対象を論じた著者にとっての盲点ともいえるかもしれない。ただ、この「内部からの視点」でインドを論じたことは、そのパイオニアとして非常に評価できるものであり、その主導権を欧米に握られてきた複雑な歴史を持つインド学にとって、著者の功績は大きいだろう。

最後に、本書の大きな目標に関して言及する。本書が属するシリーズの目的とされた「持続可能な共生のための学び」に対しては、主に二つの点で貢献が見られると考える。一つは、ヒンドゥー教の根本的思考である、人と環境の調和や、世界は一つであるとの思想をまとめ、書籍という形で世界に発信したことである。もう一つは、文化地理学者として、生態学者などとはまた異なる、環境を保護する理由を提示したことである。以上から、本書は学問的にだけでなく、現代社会にとって価値のあるものといえよう。

註

- (1) Pargiter, F. E. 1894. The Geography of Rama's Exile. *Journal of the Royal Asiatic Society New Series*, vol.26: 231-264
- (2) Singh, Rana P. B. 2004. *Cultural Landscape and the Lifeworld. Literary Images of Banaras*. Indica Books, Varanasi.
- (3) Gardner, James S. 2002. Natural hazard risk in the Kuru District, Himachal Pradesh. *The Geographical Review*, 92(2): 282-306
- (4) Granoff, Phyllis & Shinohara Koichi (eds.) 2004. *Pilgrims, Patrons, and Place : Localizing Sanctity in Asian Religions*. The UBC, Vancouver
- (5) Sinha, Amita 2006. Cultural landscape of Pavagadh : the abode of mother goddess Kalika. *Journal of Cultural Geography*, 23(2), Spring/ Summer: 84-96
- (6) Levine, Geogory J. 1986. On the Geography of Religion. *Transaction, Institute of British Geographers*, NS, 11(4): 428
- (7) Park, Chris C. 1994. *Sacred Worlds : An Introduction to the Geography of Religion*. Routledge, London: 17
- (8) Swan, James A. 1992. *Nature as Teacher and Healer*. Villard Books, New York: 200-201
- (9) Lewis, Pierce F. 1979. Axioms for reading the landscape, in, Meinig, Donald W.(ed.) *The Interpretation of Ordinary Landscapes*. Oxford University Press, New York: 15-26
- (10) Meinig, Donald W. 1979. The Beholding Eye; in, Meinig, Donald W.(ed.) *The Interpretation of Ordinary Landscapes*. Oxford University Press, New York: 33-8
- (11) Swan, James A. 1991. *The Power of Place*. Quest Books Wheaton, IL: 64-66
- (12) Singh, Rana P. B. 1984. Toward Phenomenological Geography of Indian Village : A Dialogue of Space-Time Experiences; in, Singh R. L. and Singh Rana P. B. (eds.) *Environmental Appraisal and Rural Habitat Transformation*. National Geographical Society of India, Varanasi Pub. 32: 103-115
- (13) 鈴木秀夫 1976 『超越者と風土』 大明堂